



年間第 6 主日 (マルコ 1:40-45)

困難な立場にあるときほどイエスがそばにいる

今週は季節のはざまに置かれた年間の主日から四旬節に移行する週です。水曜日には灰の水曜日が設定されていて、頭に灰をかぶり、四旬節の償いと犠牲が始まります。この典礼の切り替わりの季節に、今週の朗読箇所から学びを得ることにしましょう。

何とか、徒歩巡礼を終えてきました。3日間歩き続けましたが、わたしと一緒にいたもう一人の神父さまは初日で太ももを痛めギブアップ。2日目以降リタイアしましたので、2日目と最終3日目はたった一人の徒歩巡礼でした。徒歩巡礼と言うよりも、トホホ巡礼と言った感じです。

初日に相方が歩けなくなったことで「あー、明日からが思いやられるなあ」とへこみ、わたしは考えられないミスを犯しました。その1つは洗濯物です。初日を終え、店を探して食事を済ませ宿に戻り、明日の準備のために着ていた物を洗濯乾燥機に投げ込んだのです。

2時間ほどして戻ってみると、洗濯物は桜の花びらのように細かくちぎれた紙屑が無数にくっついた状態で乾いていました。「これはヒドイ。誰だ？こんなことする人は」などとぶつぶつ言いつつ、散乱した紙屑を洗濯物からはがして気付きました。その紙屑は、わたしが迷子にならないように用意した巡礼地図だったのです。1日のコースを4分割したものを3日分、ポケットに入れたまま洗濯していたのです。

別の事件は最終3日目の朝に起こりました。「ああ、今日も単独徒歩巡礼か・・・あれっ、今何時だ？」やってしまいました。6時起床の予定が、目覚ましに気付かず7時に起きたのです。最終木曜日は大浦天主堂に到着して2時25分のジェットfoilまで予約していました。

寝坊した1時間を挽回しなければなりません。セットで付けた朝食はあきらめ、とっとと出ようと手に掴んだものを頭からかぶったのです。ところがその頭にかぶったものがどうやっても頭を通過しません。つまり頭からかぶるものじゃない物を、生涯初めて頭からかぶったのです。独りになれば考えられないミスを犯します。次回からは、最悪でも単独での巡礼にならないメンバーを集めなければとつくづく思いました。

さて福音朗読は、「重い皮膚病を患っている人をいやす」場面です。説教の準備のために解説書を読んでいて、興味深い箇所に行き当たりました。それはギリシャ語写本の問題で、どの写本をもとに翻訳するかで意味がすっかり変わる箇所が聖書にはあるというものでした。

この問題に該当するのが「イエスが深く憐れんで、手を差し伸べてその人に触れ」（1・41）という日本語訳の「深く憐れむ」の部分です。多くの日本語訳で参考にした写本は「深く憐れんで」という読み方を採用したのですが、古い写本の中には「イエスが怒って、手を差し伸べてその人に触れ」と解釈しているものがあるのだそうです。

もし両方の解釈を示されたら、皆さんはどちらを採用するでしょうか。「イエスが深く憐れんで・・・」を採用すれば、わたしたちが一般

に想像するようなイエスさまの姿に当てはまるので受け入れやすくなります。一方「イエスが怒って・・・」を採用するとなれば、「イエスさまは怒ったりするだろうか」と疑問を持つことでしょう。

聖書を突き詰めて読もうとすると、今回のような難しい問題が出てきます。聖書は解釈が分かれるとき「より困難な読み方がより正しい」という原則があるそうです。これに従えば、だれでも受け入れられる「イエスが深く憐れんで・・・」よりも「イエスが怒って、手を差し伸べてその人に触れ、『よろしい。清くなれ』と言った」という解釈がより実際に近いことになります。そして「より困難な読み方が、より正しい学びを得られる」ということになるのではないのでしょうか。

方言を身近な例として考えてみましょう。方言の中には、標準語ではなかなか言い表せない用例もあると思います。驚きを表す「あっぱよ」は「びっくりした」でほぼ言い換えができるかもしれませんが、同情とか、共感を表す「あおー」とか「あよー」は、標準語ではなかなか言い換えが難しいと思います。「あおー」「あよー」を「同情」「共感」と言ってみたとところで、年配の方々決して納得しないでしょう。

この場合、「より困難な解釈がより正しい」のです。どの標準語でも言い表せないけれども、「あおー」は「あおー」なのです。その場面で同情し、共感したに違いありませんが、「あおー」を別の言葉に置き換えるのは、ほぼ不可能だと思うのです。

では「イエスが怒って、手を差し伸べてその人に触れ、『よろしい。清くなれ』と言った」この困難なほうの解釈に立つとしたら、誰に対して、何に対して怒ったのでしょうか。それは人を困難な状況に突き落とした病、神の望みに適った生活をさせまいとする悪への怒りなのです。

らい病とかハンセン病と言われる重い皮膚病を患った人は、家族からも離れて暮らさなければならず、人が近づくと「わたしは汚れた者です。汚れた者です」と叫ばなければなりませんでした（レビ記 13 章 45 節）。共同体の交わりを絶たれ、人間以下の生活を強いられたのです。

イエスはそのような重い皮膚病の人に、深く憐れまれたのです。人をこのような悲惨な目に遭わせる悪に対して怒りに震え、深く憐れんでこの人の病を取り除いてくださったのです。誰も手を差し伸べてくれず、触れてくれる人もなく、絶望の淵に立たされた人に、「わたしがもう一度、あなたを家族や共同体の交わりに戻してあげる」と、怒りに震えながら、深く憐れんで、いやしてくださったのです。

わたしたちはどうでしょうか。誰かを助けるために手を差し出す時、怒りに震え、深く憐れんで手を差し出すことがあるのでしょうか。誰も助けようとしなないその時、助けない人々や助けようとしなない雰囲気になりながら、たった一人ででも助けようとする場面があるのでしょうか。

あなたがもし、困難なほうの解釈に立たされる場面があるとしたら、恐らくその立ち位置は正しいのだと思います。キリスト者として、勇気を持ってそこから一步を踏み出してください。あなたの怒りにも似た深い憐れみを、イエスはきっと共にいて、支えてくださいます。